

桜への想い

2026-3-12

野口幹夫

「桜咲く」のシーズンが来た。

先週は例年のごとくまず茅ヶ崎の早咲桜の名所の小出川土手の河津桜を見に行った。

健全だった。川にはサギも鯉も見えた。

私の家の前の通りには大島さくらと八重桜の巨木があって、満開の時は海岸のラジオ体操仲間がわざわざ見に来るほどだ。

全国的に今年の開花は早いとのことでKozoom サロンの3月28日には各地で満開かもしれない。



<小出川土手の河津桜>



<我が家の近くの八重桜>

20年前のこと、その大島桜の種を野鳥が持ってきて落としたのだと思うが、実生の若木が我が家の庭に育ったことがある。10年ほどは成長に任せたが、このまま成長させると家の土台の下に根が大きく張って、家の建築物に影響が出る

と出入りの植木屋さんに言われて、残念ながら花が咲く位に大きくなる前に切り払った。

1、全国的な名桜

見てきて記憶に残る桜は巨木ばかり、二つの代表を挙げてみよう。

まずは三春の滝桜。これは16年前に行った時の写真だ。この中央の銘木のほかにこの一帯にその子供桜がいっぱいいて村全体が桜で埋まっていたのが驚きだった。

優雅な宵闇が印象的だった京都丸山公園の夜桜。京都生まれの父に連れて行ってもらった。など各地に桜の名所は散在する。



<丸山公園の夜桜>



<三春の滝桜>

2、詩と桜

桜は万葉集の時代から詠み込まれていた。その代表作は

「あをによし 奈良の都は 咲く花の薫ふがごとく今盛りなり」小野老 卷3

古今和歌集の西行法師の詩

「ねがはくは 花の下にて春死なむ そのきさらぎの もち月のころ」

3、文学と桜

梶井基次郎作『檸檬』より「桜の樹の下には屍体が埋まっている！」

衝撃的な言葉で桜のイメージに物凄さを付け加えた日本文学の名文句である。

最近までNHKの朝ドラ「バケバケ」がヒットし、あらためて注目された小泉八

雲の怪談には2編の桜の伝説が再録されている。

○乳母桜：乳母が育てている子供が病気になって、その子の命の代わりに我が身をすてるとの願いをかなえてくれた不動様に桜を植えた。その命日に必ず咲く。

○十六桜：伊予に毎年1月16日に咲く桜がある。その桜は一度枯れたが、それを愛してやまなかった老武士が自分のいのちと引き換えに再び咲くようにその木の前で切腹した。翌年からその日に必ず咲くようになった。

いずれも必死の願いが桜に乗り移る話だった。

4、芝居と桜

○能の「西行桜」は、シテが老いた桜の精、ワキが西行法師。桜の見物衆が修行の邪魔だとかぼす西行に、桜の精が現れ 桜に咎はないといさめるという筋。

○歌舞伎の「義経千本桜」は壮大な幻想物語、壇ノ浦で義経によって滅亡させら

れたはずの、平家の武将たちが実は生きていて、頼朝から追われ 逃亡する義経に襲い掛かるという話だ。静御前も追いかけるように逃亡し それを狐忠信が支援する場面には、背景が満開の吉野の千本桜が描かれる。

○ロシア文学にも桜を冠した戯曲がある。チェホフの「桜の園」だ。没落貴族が邸宅である桜の園を買い取られ、桜が切り倒される斧の音で終わる。

5、童謡や歌のさくら

○日本の童謡の代表である「さくらさくら」は、作詞家も作曲家もわからないまま「日本古謡」とされている、確かに言葉使いも古い。しかし日本人なら誰でも歌える。

さくらさくら やよいのそらは みわたすかぎり かすみかくもか においぞ
いずる いざやいざや みにゆかん

○その後に桜の名曲は次々に生まれた、例えば

『桜坂』福山雅治 2000年 『さくら』森山直太朗 2003年 『サクラ咲け』嵐 2005年 『桜』コブクロ 2005年……日本人の心に住み続ける桜の歌は、これからも生まれ続けるであろう。

桜は老いて ますます その本性を発揮し、見る人々に異常なまでの感激を与える。我々もそれにあやかりたいものだ。

サー 今年も満開を狙って見に行こう。

終